

【 復活のトロパリ 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ
 信者 父 聖神 共に 始

なきことばわがすくいのためえに
 言 吾 救 爲 え に

どうていぢょよりうまれしものをほめうとうて
 童 貞 女 生 者 を 讃 歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて
 拜 彼 甘 其 身

じゅうじかにのぼおりしをしをしのびそのこ
 十 字 架 上 お り し を し の び そ の こ

うえいのふくかつにてしせしものを
 榮 復 活 つ に て し せ し も の を

ふくかつせしめたまあえばなあり。
 復 活 給 ば な あり。

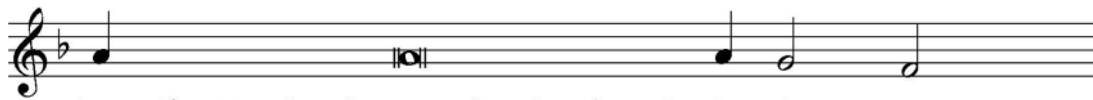
【 十字架擧榮祭のトロパリ 第1調 】

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢ
 主 爾 民 救 爾

のぎょうにふくをくだせ、わがくにの
 業 福 降 吾 國

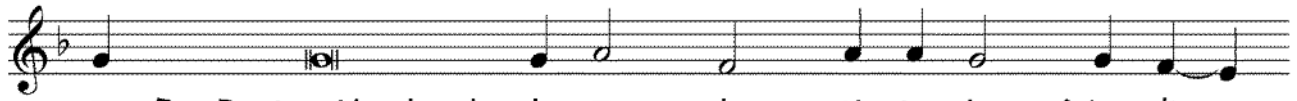
てんのおうおよびくにをつかさどるものにて敵
 天 及 國 司 者 敵

きにかたしめ、なんぢのじゅうじかにて
 勝 爾 十 字 架 にて

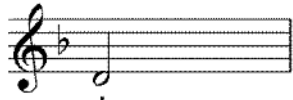


なんぢのすまいをまもりたまえ。
爾 住 處 守 給

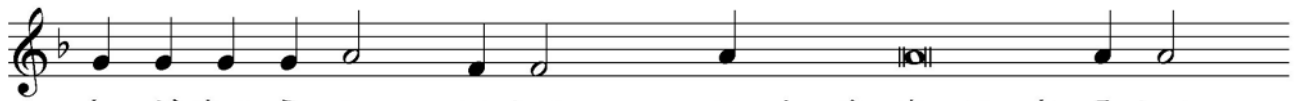
【 復活のコンダク 第5調 】



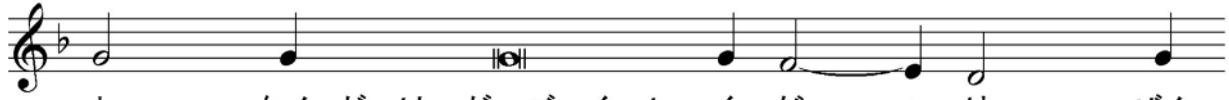
こうえいはちちとこ と せいしんにきい
光 榮 父 子 聖 神 歸



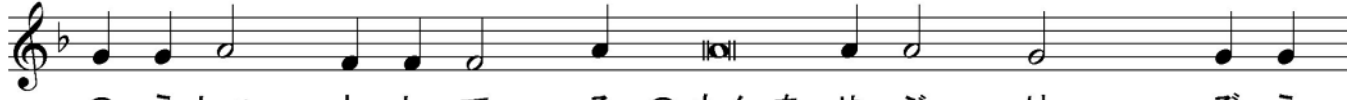
す、



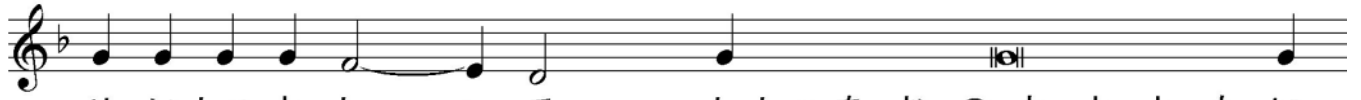
わがきゆうせいしゅ、ひとをあいするしゅ
我 救 世 主 人 愛 主



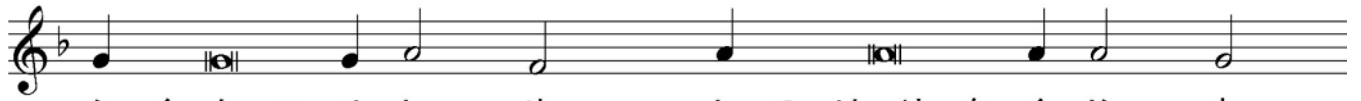
よ、なんぢはぢごくにくだあり、ぜん
爾 地 獄 降 全



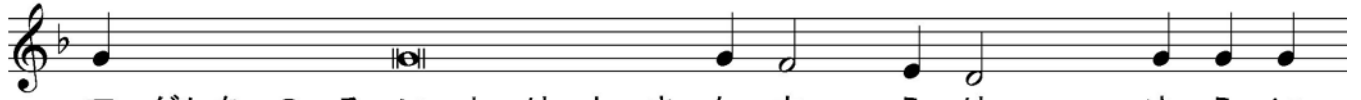
のうしゃとしてそのもんをやぶり、ぞう
能 者 其 門 壊 造



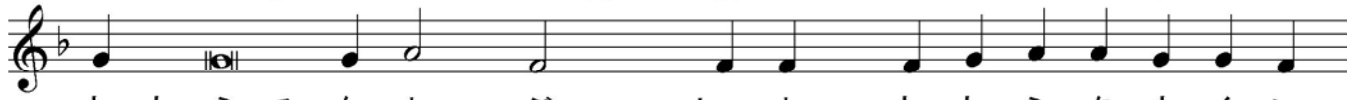
せいしゅとしいて、ししゃをおのれとともに
成 主 死 者 己 借



ふくかつせしめ、しのはりをくじき
復 活 死 刺 折 き



アダムをのろいよりときたまえり。ゆえに
詛 釋 給 故



われらみなよぶ、しゅよ、われらをすくい
我 等 皆 呼 主 我 等 救



たまえ。
給

【 十字架擧榮祭のコンダク 第4調 】

い ま も い つ う も よ よ に 、 ア ミ ン。
 今 何 時 世 世

あ ま ん じ て じ ゅ う じ か に あ げ ら れ し ハ リ ス ト ス か み
 甘 十 字 架 擧 し ハ リ ス ト ス 神

よ 、 な ん ち が ど う め い の あ ら た な る す ま い に
 爾 同 名 新 住 處

な ん ち の じ れ ん を た ま え 、 な ん ち の ち か ら を
 爾 慈 憐 賜 爾 力

も お っ て わ が く に の て ん の う お よ び く に を
 以 我 國 天 皇 及 國

つ か さ ど る も の を た の し ま し め て 、 か れ
 司 者 樂 彼

ら に て き に か た し め た ま あ え 、 か れ ら
 等 敵 勝 給 彼 等

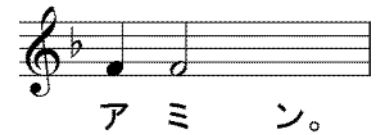
は な ん ち の た す け と し て へ い あ ん の ぶ う
 爾 援 助 平 安 武

き 、 か た れ ん ぬ は た を た も て ば な り 。
 器 勝 旗 有

司祭司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之をかざねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいため飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲

つうかい た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ
 に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる 爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が
 せい さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た
 聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる
 もの しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ
 者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の
 じんじ もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい
 仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈
 からだ せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
 と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖
 しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
 なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 憐
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神
 に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世
 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 十字架擧榮祭の 第7調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主、我が神を崇め讃め、其足凳に伏し拜めよ、是れ聖なり、

し ゅ わ が か み を あ が め ほ め 、 そ の あ し だ
 主 我 神 崇 讃 其 足 台
 い に ふ し お が め よ 、 こ れ せ い な り 。
 伏 拜 是 聖

誦經) ^{しゅ おう} 主は王たり、^{しよみんおのの} 諸民 戦くべし、

しゅ わ が か み を あ が め ほ め 、 そ の あ し だ
主 我 神 崇 讃 め 其 足 台
い に ふ し お が め よ 、 こ れ せ い な り 。
伏 拜 是 聖

誦經) ^{しゅ わ かみ あが ほ} 主、我が神を崇め讃め、

そ の あ し だ い に ふ し お が め よ 、 こ れ せ い
其 足 台 伏 拜 是 聖
な り 。

【 アポστόロス 使徒經 203 端 ガラティヤ書 2 章 16～20 節 及び 170 端 コリント後書 1 章 21 節～2 章 4 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルがガラティヤ人^{じん たつ}に達する書^{しよ よみ}の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{ひと りつぼう} 人は律法^{おこない}の行^よに由^{あら}るに非^{ただ}ず、唯^{しん} イスス^{しん} ハリストス^よを信^ぎずるに由^ぎりて義とせらるるを知りて、我等もハリストス イススを信ぜり、ハリストスを信ずるに由り、律法の行に由らずして、義とせられん爲なり、蓋 律法の行に由りては、人一人も義とせらるるなし。若し我等ハリストスに由りて義とせられんことを求めて、自も猶罪人たらば、豈ハリストスは罪の役者たるか。非らず。蓋 若し我が毀ちたる者、我復之を建てば、則己の罪人たるを示すなり。我律法に由りて律法の爲に死せり、神の爲に生きん爲なり。我ハリストスと共に十字架に釘せられたり。既に我生くるに非ず、即ハリストスは我の中に生くるなり。我が今肉體に在りて生くるは、我を愛して我が爲に己を捨てし神の子を信ずるに由りて生くるなり。

(比較用 口語訳) 人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。なぜなら、律法の行いによっては、だれひとり義とされることがないからである。しかし、キリストにあつて義とされることを求めることによって、わたしたち自身が罪人であるとされるのなら、キリストは罪に仕える者なのであろうか。断じてそうではない。もしわたしが、いったん打ちこわしたものを、再び建てるとすれば、それこそ、自分が違反者であることを表明することになる。わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあつて生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。

誦經) けいてい われら なんぢら とも けんご およ われら あぶら もの かみ
兄弟よ、我等を爾等と偕にハリストスに堅固にし、及び我等に膏つけし者は神なり、
かれ われら いん かつしん へいし われら ところ あた われかみ よ わ たましい
り、彼は我等に印し、且神の聘質を我等の心に與えたり。我神を籲びて我が靈の
しょうしゃ な われいま いた いた なんぢら ゆうじょ ゆえ こ
證者と爲す、我今に至るまでコリンフに至らざりしは、爾等を宥恕するが故なり。此
われら なんぢら しん しゅ あら すなわちなんぢら よろこび たす けだしなんぢら しん もつ
れ我等は爾等の信に主たるに非ず、乃爾等の喜を助く、蓋爾等は信を以て
た われまたうれい もつ なんぢら いた みづか さだ けだしも われなんぢら うれ
立つなり。我復憂を以て爾等に至らざらんと自ら決めたり。蓋若し我爾等を憂
いしめば、我が憂いしむる者の外、誰か我を喜ばしめん。我が書して爾等に達せしは
すなわちこれ われきた とき われ よろこ もの よ うれい う ため けだし
即是なり、我來る時、我を喜ばしむべき者に由りて、憂を受けざらん爲なり、蓋
われ なんぢしゅう おい わ よろこび なんぢしゅう よろこび しん われおおい かなしみ ところ
我は爾衆に於て、我が喜は爾衆の喜なりと信ず。我大なる哀と心の
いたみ よ おお なみだ もつ なんぢら しよ なんぢら うれ ため あら すなわち
痛とに縁りて、多くの涙を以て爾等に書せり、爾等を憂いしめん爲に非ず、乃
わ なんぢら お あい ふか し ため
我が爾等に於ける愛の深きを知らしめん爲なり。

(比較用 口語訳)
あなたがたと共にわたしたちを、キリストのうちに堅くささえ、油をそそいで下さったのは、神である。神はまた、わたしたちに証印をおし、その保証として、わたしたちの心に御靈を賜わったのである。わたしは自分の魂をかけ、神を証人に呼び求めて言うが、わたしがコリントに行かないでいるのは、あなたがたに対して寛大でありたいためである。わたしたちは、あなたがたの信仰を支配する者ではなく、あなたがたの喜びのために共に働いている者にすぎない。あなたがたは、信仰に堅く立っているからである。そこでわたしは、あなたがたの所に再び悲しみをもって行くことはすまいと、決心したのである。もしあなたがたを悲しませるとすれば、わたしが悲しませているその人以外に、だれがわたしを喜ばせてくれるのか。このような事を書いたのは、わたしが行く時、わたしを喜ばせてくれるはずの人々から、悲しい思いをさせられたくないためである。わたし自身の喜びはあなたがた全体の喜びであることを、

あなたがたすべてについて確信しているからである。わたしは大きな患難と心の憂いの中から、多くの涙をもってあなたがたに書きおくれた。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、あなたがたに対してあふれるばかりにいただいているわたしの愛を、知ってもらうためであった。

【 アリルイヤ 十字架擧榮祭の 第1調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、
ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{なんぢ いにしえ え かい きおく} 爾が古より獲たる會を記憶せよ、

ア リル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、
ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{かみ わ こせい おう すくい ち なか な} 神、我が古世よりの王は救を地の中に作せり、

ア リル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、
ア リル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念
^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ
畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ わげん ちち しせいしぜん
爾は我が 靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を 施す 爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

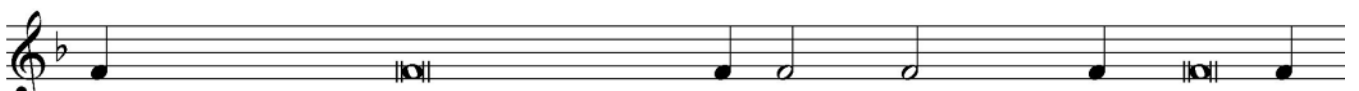
【 エヴァンゲリオン 福音經 マルコ福音書 37 端 8 章 34~9 章 1 節 及び マトフェイ福音書 89 端 22 章 1~14 節 】

司祭) えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん
睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) でん せいふくいんけい よみ
マルコ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) つつし き しゅい われ したが ほつ もの おのれ す そのじゅうじか お
謹みて聴くべし、主曰えり、我に従わんと欲する者は、己を捨て、其十字架を負
いて我に従え。蓋己の生命を救わんと欲する者は、之を喪わん、我及び福音の
ため おのれ いのち うしな もの これ すく けだしひと も ぜんせかい う おのれ たましい
爲に己の生命を喪わん者は、之を救わん。蓋人若し全世界を獲とも、己の靈
そこな なん えき そもそもひとに あた そのたましい つくのい な けだしこ
を損わば、何の益かあらん。抑人何を與えて、其靈の償と爲さんや。蓋此
かんあく よ おい われおよ われ ことば は もの ひと こ そのちち こうえい もつ せい
の姦惡の世に於て、我及び私の言を耻ぢん者は、人の子も其父の光榮を以て聖な
てんしら とも きた としけれ は またかれら い われまこと なんぢら つ ここ た
る天使等と偕に來らん時彼を耻ぢん。又彼等に謂えり、我誠に爾等に語ぐ、此に立て
もの うち いま し な かみ くに けんのう もつ きた み かの もの
る者の中には、未だ死を嘗めずして、神の國が權能を以て來るを見んとする者あり。

(比較用 口語訳)

主は彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、

自分の命を失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。邪悪で罪深いこの時代にあつて、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう」。また、彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。神の国が力をもって来るのを見るまでは、決して死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。

司祭) 主は左の譬を設けて曰えり、天国は其子の爲に婚筵を設けたる君王の如し。彼其

諸僕を遣して、召されし者を婚筵に招きたれども、彼等来るを欲せざりき。又他の僕

を遣して曰えり、召されし者に告げて云え、視よ、我已に餐を具え、我が牛と肥えたる

畜と已に宰りて、一切備われり、婚筵に來れ。然れども彼等は顧みずして、或者

は其田に、或者は其貿易に往けり、余の者は彼の諸僕を執え、辱しめて、之を殺せ

り。王之を聞きて怒り、其軍を遣して、彼の兇人を滅し、彼等の邑を燬けり。時に

彼其諸僕に謂う、婚筵備わりたれども、召されし者は堪えず、故に爾等通衢に往きて、

遇わん者を悉く婚筵に招け。其僕途に出でて、凡そ遇いたる者、悪しきと善きとを問

わず、之を集めれば、婚筵に席坐する者満ちたり。王は席坐する者を觀ん爲に入りて、

彼處に一人の婚禮の服を衣ざる者あるを見て、之に謂う、友よ、爾何ぞ婚禮の服を衣

ずして此に入りたる、彼默然たり。其時王は役者に謂えり、彼の手足を縛りて、彼を

取りて、外の幽暗に投ぜよ、彼處に哀哭と切齒とあらん。蓋召されたる者は多けれども、

選ばれたる者は少し。

(比較用 口語訳)

イエスはまた、譬で彼らに語って言われた、「天国は、ひとりの王がその王子のために、婚宴を催すようなものである。王はその僕たちをつかわして、この婚宴に招かれていた人たちを呼ばせたが、その人たちはこようとはしなかった。そこでまた、ほかの僕たちをつかわして言った、『招かれた人たちに言いなさい。食事の用意ができました。牛も肥えた獣もほふられて、すべての用意ができました。さあ、婚宴においでください』。しかし、彼らは知らぬ顔をして、ひとり自分の畑に、ひとり自分の商売に出て行き、またほかの人々は、この僕たちをつかまえて侮辱を加えた上、殺してしまった。そこで王は立腹し、軍隊を送ってそれらの人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。それから僕たちに言った、『婚宴の用意はできているが、招かれていたのは、ふさわしくない人々であった。だから、町の大通りに出て行って、出会った人はだれでも婚宴に連れてきなさい』。そこで、僕たちは道に出て行って、出会う人は、悪人でも善人でもみな集めてきたので、婚宴の席は客でいっぱいになった。王は客を迎えようとしては

いってきたが、そこに礼服をつけていないひとりの人を見て、彼に言った、『友よ、どうしてあなたは礼服をつけないで、ここにはいってきたのですか』。しかし、彼は黙っていた。そこで、王はそばの者たちに言った、『この者の手足をしばって、外の暗やみにほうり出せ。そこで泣き叫んだり、齒がみをしたりするであろう』。招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀3（金ロイオン）へ